

取り組みの実施体制



伝えるコミュニケーションが上手です。これは将来、社会に出た時にもおおいに役立つはずです」。

「経験」は

コミュニケーション最大の武器

それでは、実際にこのプログラムに参加している学生は何を学び、どのように成長しているのでしょうか。

西中健太さんと小西綾子さん(ともに経済学部3年)は、元の商店街や観光地の島の住民との対話を通じたプログラムを次のように振り返ります。



西中健太さん
その場で人の気持ちを理解すること、そしてそれをしっかりと受け止める



小西綾子さん
「学ぶきっかけは、自分が気づいていないだけで本当はいろいろなところにあると感じました。そのきっかけを自らつかみ、一つひとつ自分の力にしていくことがコミュニケーション能力を向上させるために有効な方法ではないかと考えています。専門

「今までとは全く違う環境での取り組みは最初とても不安でしたが、地域で活動をしていくうちに不安が好奇心に変わっていく楽しさがありました。それは人に対しても同じで、

違ふ年代の人や初対面の人に対して、自分の思い込みや壁を作らないことが大切であることを感じました。実際、年配の方は本当にいろいろな知識や知恵を持っていて学ぶべきことが多くありました。コミュニケーションを取る

まえに先人観や壁を作ってしまうことが、相互理解に大きな障害になっていることがわかりました」(西中さん)。

「大学の授業では、自分は多くの学生の中の一部でしかありませんが、地域に出ると自分を個人として見てくれていると感じることを実感しました。反面、自分の意見に対する責任も求められます。いろいろな立

て自分の意見を伝えなければならぬ大切さを、このプログラムで学びました」(小西さん)。

「考える」きっかけはフィールドワークにある

地域社会での経験は、二人にとつて新たな自分を発見する日々でもあったといえます。

「地域の方々と話をして学んだことは、経験をもとにした話は、説得する強さが違うということです。このプログラムを通して経験することの大切さを学び、何にでも挑戦してみようという積極的な姿勢が身につきました。その結果、相手の質問がよく理解できなかつたとしても「わかりません」と言うのではなく、相手がどのような経験をもとにその質問をしているのかを考えながら、深く掘り下げてコミュニケーションが

的なことを大学で学ぶ時にも、常に相手にどう伝えたらいいかを考える習慣が身につきました」(小西さん)。

最後に、原教授は地域を活性化させるために必要なこととして「大学で学んだことを地域社会のどんな場面で活かすことができるかを常に考えること」が大切だといいます。

「地域社会で貢献していると思っ



フィールドワークで地域商店街の方にヒアリングを行う